インターナショナルスクールの日本語教育

－小学生を対象とした日本語サマースクールにおける実践例－

松井　咲子

1. はじめに

本稿は報告者が 2007 年夏期に都内にあるＮインターナショナルスクールにおいて担当した日本語サマースクールの実践報告である。

近年、国内では初等中等教育の段階から国際社会で通用するような教育を受けさせたいという希望から、インターナショナルスクールへの入学希望が高まっている（中川・中山 2005）。国際基督教大学へも、9 月入学の四年本科生を中心に、海外帰国生と共に毎年インターナショナルスクール出身者が入学し、多くが初年度に日本語教育課程で継承語として日本語を学んでいる。彼／彼女らを迎え、日本語能力の伸長をサポートする立場にある我々日本語教師にとって、彼らの大学入学前の学習環境、殊に日本語学習の背景を知ることは非常に重要であるといえる。一方、インターナショナルスクールにおける日本語指導の報告は、松本・榛葉・直井（1994）、原（2003）など数が限られており、特に近年の初等教育に関わる報告は非常に少ない。

本稿は、報告者が担当した小学校 2 年生の日本語クラスの指導実践を報告し、サマースクールを通して観察されたインターナショナルスクールの教育について述べることにより、大学でインターナショナル出身者に対して日本語教育を行う際に教師が持つべき視点について考察することを目的とする。

2. Ｎインターナショナルスクールについて

2.1. 学校概要、教育理念

Ｎインターナショナルスクール（以下Ｎスクール）は、1949 年に設立された歴史ある男女共学のインターナショナルスクールである。

Ｎスクールは、終戦直後に、国際社会への日本の復興を願い、それまでの日本の教育とは違った新しいアプローチによって自立した個性を育む教育の場として創設された。1955 年には学校法人として東京都に認可され、キンダガーテン（幼稚部）から 9 年生（中学 3 年生）までの一貫教育を行っている。現在は世界 30 か国余りから約 450 名の生徒が学んでおり、二重国籍保持者を含む約 230 名が日本国籍である。

1999 年より 2007 年までの卒業生の 32％の生徒が海外の高校に進学している一方で、62％の生徒が日本国内のインターナショナルスクールに進学している。卒業生には、国際基督教大学高校、国際基督教大学への進学者も含まれている。

2.2. Ｎスクールの日本語教育

Ｎスクールでは、設立当初から日・英の二カ国語教育が教育の柱とされ、1956 年より日本語教育が行われている。1962 年からは日本語学習が必須科目となり、現在も 1 年生

から 9 年生までの全員が日本語科目を履修している。

Nスクールの日本語クラスは、母語話者対象の F クラス（Japanese as a First Language）、S クラス（Japanese as a Second Language）、そして F と S の中間に位置する JNN（Japanese for Near Native）という 3 つのクラスに分かれており、児童・生徒は自分の日本語能力に応じたクラスを履修することができる。S クラスでは、絵本や教科書を使用して外国語としての日本語指導が行われるのに対し、F クラスでは、文部科学省のカリキュラムに沿った国語教科書を使用した国語教育が行われる。

2.3. 日本語サマースクールの概要

N スクールでは、幼稚部入園前児から 8 年生を対象に、2 週間のサマープログラムを提供している。1 年生－8 年生向けには日本語サマースクールが開かれ、F クラスおよび JNN クラス、S クラスそれぞれに特色あるカリキュラムが組まれている。

F および JNN クラスでは、文部科学省の定めた国語のカリキュラムを復習し、教科書の内容を深く理解して次学年度での学習がスムーズに進められるようにすることに焦点が当てられ、理科・科学、社会科、書道、スポーツ、美術の分野においても国語の能力を高めることが目的とされている。S クラスでは、日本語の環境の中で、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことを学び、日本語でのコミュニケーションがとれること、また日本文化に対する理解を深めることが目的とされ、書道や調理実習など様々な体験学習型のプログラムが提供される。4 年生から 8 年生の希望者は、2 週間のサマープログラムのうちの 1 週間を東北地方でのキャンプに参加することができ、そこでは生徒間のやりとりや、姉妹校との交流のなかで日本語力を高めることが目指されている。

日本語サマースクールでは、児童・生徒は午前中のスナック休憩と昼休みを挟んで、午前中に 4 コマ、午後 2 コマの 1 日計 6 コマ（1 コマ 50 分）の授業を受けることになっている。うち 4 コマが日本語のクラスとなり、残りの 2 コマは理科・科学、社会科、書道、スポーツ、美術などに充てられる。

また、N スクールでは、学年ごとに与えられたテーマに沿ったテーマ学習が行われ、テーマ達成に必要な語彙、文型、表現を定着させることがサマースクールのゴールとなる。報告者が担当した 2007 年度の低学年 S クラスのテーマは、1 年生が「夏：七夕」、2 年生は「私達の町、麻布十番」、3 年生は「宇宙」であった。

サマーコースでは、日本語は各クラス 1 名の教員が担当する。日本語以外の科目については、科目ごとに 1 名ずつ教員が配置される。日本語の担当教員は全員日本語母語話者が担当するが、日本語以外の科目の中には、非母語話者である N スクール所属の教員が英語で行うものもある。

N スクールのサマーコースは任意であり、希望者のみが参加する。家庭の事情などにより、1 週間だけの参加も可能である。サマーコースは評価の対象にはならないが、2 週間のプログラム修了者には修了証が渡されることになっている。

3. サマーコース 2 年生 S クラス実践報告

上記のような特性を持つ N スクールのサマーコースにおいて、報告者は 2 年生 S クラ

ス（以下 2S クラス）を担当した。以下はその実践報告である。

3.1. 2S クラス概要

2S クラスの児童数は 6 名であった。全員が非母語話者であり、両親のうちどちらかが日本語母語話者という者もいなかった。国籍はアメリカ、オーストラリア、パナマ、シンガポールなどである。全員が親の日本赴任に伴って来日したという経緯から、滞在年数はまちまちであり、日本語学習歴、日本語力にも大きな差があった。日本語学習歴が 2 ヶ月に満たず、ひらがなが読めない者が 1 名いたが、他の 5 名はひらがな・カタカナは全員一通り読み書きができ、中には家庭教師による日本語指導を受けているものがいるなど、普段から日本語学習に熱心に取り組んでいる様子であった。6 名のうち 1 名は、家庭の事情で 1 週間のみの参加となり、残り 5 名が 2 週間のプログラムを修了した。

N スクールでは、日本語のクラス内で英語で教師に質問をする必要がある場合には、「英語で言ってもいいですか」と教師に確認することが徹底されており、N スクールがクラスでの日本語使用を重視していることがうかがえた。N スクールの教員の助言を受け、報告者も授業ではクラスでの指示やマナーの指導は日本語のみを使うよう努め、子どもたちにもできる限り日本語で話させるようにした。難しい説明に限っては媒介語である英語を用いて行った。

3.2. 2S クラスコースデザインについて

サマーコースでは、コースデザインはすべて担当教員が行うことになっていたため、報告者は、比較的自由な枠組みの中で、「私たちの町」をテーマとした 2 週間のプログラムを作成した（資料①参照）。

第 1 週目は、校外学習による街の観察と、おにぎり・かき氷の調理実習による日本文化体験を大きな柱とした。第 2 週目は、Nスクールがある町で毎年大きな夏祭りが行われることから、クラスで夏祭りを計画し、夏祭りコマーシャルの作成とビデオ撮影、みこしづくりなどの活動を行った。当日は子どもたちの家族も招待して教室内での夏祭りと縁日を楽しんだ。

3.3. 活動実践例　－　買い物実習・おにぎり、カキ氷作り

2 週間の日本語コースのなかで、「日本文化」に触れる体験学習の一貫として、「かき氷・おにぎり」の調理実習を計画し、材料の買い出しから調理、活動の振り返り、という大きい 3 つの段階を追って進めた。具体的な活動内容とスケジュールは以下のとおりである。

1 日目	おにぎり、かき氷の紹介 買い物リストの作成 買い物のシミュレーションとロールプレイ
2 日目	校外学習・買い物体験
3 日目	絵本『おにぎり』読み聞かせ
4 日目	調理実習 レシピ作成

当初は、買い物と調理実習を同日に行うことを計画していたが、校外学習の引率者の予定と、実習を行う調理室の空き状況から、二日に分けて行わざるを得なくなった。そこで、校外学習と調理実習の間の 3 日目に絵本の読み聞かせを行った。

＜1 日目＞

まず、「おにぎりとかき氷を知っていますか。」という子どもたちへの問いかけをしたところ、ほとんどの子どもたちが知っていると答えたので、おにぎり、カキ氷について知っていることを自由に話させた。子どもたちへの問いかけは日本語のみで行い、子どもたちは、日本語に自信がある子どもは日本語で、あまり自信がない子どもは英語を交えて答えた。やり取りの過程で、おにぎり、かき氷作りに必要なものは何か考えさせ、子どもたちから出てきたものを板書して、全員で意味と発音を確認した。

次にペアで買い物リストを作成させた。「のり」「うめぼし」など全く知らなかった子どもたちも、丁寧にひらがな・カタカナを使って買い物のリストを完成させた。子どもたち同士の会話は、自然と英語が中心となったが、やりとりのなかで分かる子どもが分からない子どもに教えてあげるなど積極的に助け合う姿勢が見られた。

リスト完成後は、実際の買い物場面を想定し、買い物リストを見ながら、「〇〇はどこですか」「△△はありますか」「いくらですか」など買い物に必要な表現を使ったロールプレイを行って翌日の買い物実習に備えた。

＜2 日目＞

買い物実習当日は、学校から街に出て、商店街を散策した。街に出るまでの路地では、街の標識のひらがな、カタカナから坂の名前や町の名前などを学習し、様々な国の大使館があることなどを確認した。

商店街では、どのような店があるのかを観察させると共に、50 音が書かれたタスクシートを配布してペアで「あ」から「ん」までの文字で始まる店の名前を見つけるタスクを行った。また、英語、カタカナ、ひらがなと看板が書かれている文字の種類にも注目させた（資料②）。商店に入っての買い物では子どもたちは自然に役割分担を行い、お互いに助け合って商品について店員に尋ね、商品を選び、会計を済ませることができた。

子どもたちは、外に出られたことで興奮し、コントロールが難しくなる場面もあったが、ゲーム感覚で行うタスクを準備したことで、楽しく校外学習を行うことができた。また、買い物実習では自分の日本語が相手に通じたという喜びが自信へとつながり満足げな表情だったことが印象的であった。

＜3 日目＞

前日の買い物の記憶が新しい子どもたちに、絵本『おにぎり』（平山英三著、1992 福音館書店）を読み聞かせ、おにぎりの形（三角、丸など）、材料（ごはん、しお、うめぼし、のり）、作り方（にぎる、のりを巻くなど）を全員で復習した。読み聞かせの後は、絵本に出てくるおにぎりを握る手つきを真似るなどして、みんなでおにぎり作りのイメージを膨らませることができ、翌日の実習への効果的な動機づけとなった。

＜4 日目＞

調理実習当日は、もう一度前日に読んだ「おにぎり」を読み聞かせ、再度作り方を確認後、調理室で実習を行った。絵本がよほど印象的だったのか、子どもたちは「くるっくるっ」という絵本のフレーズを繰り返しながら、上手におにぎりを握った。おにぎりの試食の後には、かき氷のデザートも楽しんだ。おにぎりはたくさん作り、家族へのおみやげとすることにした。実習の後は、活動の振り返りとしてクラスで感想を述べ合った後、ワークシートでレシピを完成させるタスクを行い（資料③）活動のまとめとした。

4. 考察

日本文化に触れる体験学習は 4 日間の活動であったが、子どもたちは楽しみながら、積極的に活動に取り組んでいた。活動を通して「読む」「聴く」「話す」「書く」の四技能をフルに活用できるタスクを実施するように試みたが、子どもたちは「おにぎり作り」という楽しいイベント活動の流れの中でどの活動にも抵抗なく取り組んでいた様子であった。

大学など高等教育としての日本語学習とは異なり、家族の転勤などで急遽母国を離れ、日本にやってきた子どもたちに対しては、日本語学習の動機づけが難しい。今回担当したクラスの子どもたちは比較的、日本語学習に好意的な姿勢を持っていたが、それでも 1 日 50 分授業を 4 コマ分学習に向かわせるためには、体を動かして、楽しい活動を行うことが不可欠であった。また、日本語学習に対して「難しい」「つまらない」というネガティブな感情を持たせることも避けたかった。以上の理由から、学習活動に「買い物実習、おにぎり作り」というイベント性を持たせたことは非常に効果的であった。実践例として挙げた活動の他にも、「おみこし作り」「2S 夏祭り」という大きいイベントを設けたが、それぞれの活動は子どもたちが楽しく遊びながら日本文化に触れ、日本語への理解も深めることにつながったと考える。

買い物実習では、実際に商店で店員に自分の日本語が通じたということが大きな自信となったようである。また、上手な子どもが積極的に店員とのコミュニケーションを担当し、日本語力が低い子どもには、最後の会計の責任者とするなど子どもたちが自主的に役割分担を決め全員がきちんと役割を果たせるよう工夫していたことは非常に感慨深かった。インターナショナルスクールで学ぶ子どもたちは、日本にいながら、なかなか日本の社会と接点を持つことは難しい。いわば、日本の中の特殊なコミュニティーに属しているこのような子どもたちが、学校外に出て、興味を持って街や人を観察し、社会との関わりを持つことは、日本語学習のみならず、異文化理解教育の面からも非常に有意義だと感じた。

5. まとめ

2 週間という限られた期間ではあったが、子どもたちとの関わりの中で報告者も多くの学びを得た。子どもたちへの日本語学習には、子どもたちが興味を持てる動機づけ、興味を持ち続けるための活動が不可欠である。またインターナショナルスクールという特殊な環境にいる子どもたちには、地域とのかかわりの中で日本語を使い、日本文化に触れるという活動を積極的に進めていかなければならない。

国際交流基金日本語国際センター（2003）は、「日本語学習スタンダーズ日本語版」の中で、

1. コミュニケーション（Communication）日本語でコミュニケーションを行う。
2. 文化（Culture）日本文化を理解し、知識を習得する
3. コネクション（Connections:つながり）
4. 比較（Comparisons）日本語と母語の比較により言語と文化への洞察力を養う
5. コミュニティー (Communities:地域社会)国内および国外において多文化・多言語社会に参加する。

という 5 つの学習目標（いわゆる 5C）を掲げているが、この 5 つの目標はインターナショナルスクールの子どもたちが必要とする日本語教育にもそのまま当てはまる。今回の 2S クラスのサマーコースでの活動を振り返ると、コミュニケーション、文化、コネクション、コミュニティーに関わる活動は実現できたが、4 つ目の目標である比較(Comparison）の視点が欠けていた。今後は、今回の反省を踏まえて、比較（Comparison）という目標も視野に入れ、子どもたちが日本語学習を通してから自分の母語や文化にたいして客観的な視点を持つことができるよう指導を考えたい。

また、子どもたちへの指導にとどまらず、彼らが成長して大学に入学してきたとき、彼らへの指導を考える際にも、この 5 つの目標が一つの座標になるのではないか。インターナショナルスクール出身生のみならず、海外協定校からの 1 年本科生（交換留学生）、一学期のみの短期留学生など、ますます多様化する本学の日本語学習者のニーズに対応したコースデザインや教材開発を行っていこうとする我々に対して、この 5 つの目標は考慮すべき視点を示してくれていると考える。

参考文献

国際交流基金日本語国際センター（2003）「21 世紀の外国語学習スタンダーズ「日本語学習スタンダーズ」日本語版」

中川千恵子・中山由佳（2006）「ある接触場面における一考察 - インターナショナルスクール出身者の日本語母語話者クラス報告 - 」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』19　早稲田大学日本語教育研究センター　99-129

原和久（2003）「ホームページを活用した授業情報一元化の試み - インターナショナルスクールの日本語教室から」年会論文集 19　日本語教育情報学会　44-47

松本典子・榛葉久美・直井和子（1994）「アメリカン・スクールにおける日本語教育とその模索」『日本語教育』83　日本語教育学会 161-171

N スクールについては、以下のホームページを参照した。

http://jp.nishimachi.ac.jp/　2010 年 11 月 27 日

資料①　サマーコース2S スケジュール

	6/18 (Mon)	6/19(Tue)	6/20(Wed)	6/21(Thurs)	6/22 (Fri)
1	・自己紹介 ・クラスのルールの確認 ・歌でクラスルームインストラクションの日本語を練習する	＜前日の Review＞ ・show & tell （自分の大切な物） ・校外学習につい話す ・地図を見て学校の位置、学校の周りにある物の名前を確認する	**PE**	・麻布十番 short presentation ・商店街のお店の看板を作る。 （店の名前も再度確認）	**Drama**
2			**JSS （社会科）**		**Music**
3	**Team Building**	・買い物の練習をする ・学校の周りにあるものの名前の書き取りをする ・自分が作りたいパペットの絵を描く	＜校外学習＞ ・麻布十番商店街へ行き、街を観察する。 ・調理実習に使う食材を購入する。	**Art**	＜パペット講習会＞ パペットの作り方を良く聞き、パペットを作る。
4	**Aikido**			**Shuji**	
5	・東京の地図を見て、自分の住んでいる場所を示し、自分の町を紹介する。	**Science Club**	・見てきたものについて報告しあう。 ・麻布十番 short presentation 準備	・絵本「おにぎり」を読む ・おにぎりの作り方を知る	・おにぎりとかき氷の作り方を復習する ＜調理実習＞
6	・自己紹介カードを作成				

	6／25 (Mon)	6／26 (Tue)	6／27(Wed)	6／28 (Thurs)	6／29 (Fri)
1	**Team Building**	麻布十番の夏祭りについてインターネットで調べて発表する。	**JSS （社会科）**	**Art**	**Music**
2	**Aikido**		**P.E.**	**Shuji**	**Drama**
3	・日本の食べ物の名前を知る。 （ゲーム） ウォームアップゲーム	・お祭りのコマーシャルを作る （ビデオに録画する ・ 絵本を音読をする。	・色の名前、工作に使う用語を学ぶ（はさみ、のり、切る、貼る、描くなど） ・麻布十番祭りうちわを紹介（「色」の語彙を使って描写させ、好きなところを伝え合う） （Show and Tell ②）	・縁日の準備 ・おみこし作り②	・おみこし作り③ ・盆踊りの練習
4	・昔の麻布十番や、当時の家、道具などの写真を見せ、現代との違いを確認する				
5	・日本の昔話「ももたろう」の紙芝居を見せる。 （ストーリーをつかませる。）	**Science Club**	・麻布十番うちわのデザインをする（絵と共に必ず文字も入れる） ・縁日への招待状を書く ・おみこし作り①	・1S クラスと合同でパペットショー ・コマーシャルビデオの発表 ・縁日で遊ぶ	・2 週間の振り返り ・サマースクール修了式の発表準備
6	・ももたろうの歌を歌う 『パオちゃんの夏祭り』 読み聞かせ				

資料②

＊わたしたちのまち　Field Trip＊

あ	い	う	え	お
か	き	く	け	こ
さ	し	す	せ	そ
た	ち	つ	て	と
な	に	ぬ	ね	の
は	ひ	ふ	へ	ほ
ま	み	む	め	も
や		ゆ		よ
ら	り	る	れ	ろ
わ	を	ん		

★　えいごのなまえのおみせ　（　　）
★　ひらがなのなまえのおみせ　（　　）
★　カタカナのなまえのおみせ　（　　）

資料③

＊おにぎりのつくりかた＊

ざいりょう（ingredients）

★ ＿＿＿＿＿＿　★ ＿＿＿＿
★ ＿＿＿＿＿＿　★ ＿＿＿＿

1．　てをあらいます。

2．てに（　　）をつけます。

3．てに（　　）をつけます。

4．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

5．くるっ、くるっ。

6．（　　）をまきます。

できあがり！